津田梅子の生き方（4）～アメリカへ～

横浜から出港しアメリカに向かった日本人一行は、長い航海の間、壮絶な船酔いに苦しめられます。それは梅子たちのような子供であればなおさらでした。絶え間なく船を揺らす波に苛まれ、食事もろくに喉を通りませんでした。船内での 5 人の留学生のお世話は、アメリカに帰国するアメリカ公使・チャールズ・E・ディロングの夫人がしてくれました。ただし、ディロング夫人は日本語を話せず、女子留学生たちも英語を話せなかったので、きちんとした意思疎通は図れませんでした。

一行を乗せたアメリカ丸は 24 日間の船旅を終えると、翌 1872（明治 5）年 1 月、ようやくサンフランシスコに到着します。久しぶりに陸の上を歩いた梅子たちは、おぼつかない足取りのままホテルに到着します。そして実際にアメリカで暮らす人々の姿を目の当たりにして、目を丸くすることになるのです。一方で、迎えるアメリカ人たちも、振袖姿の 5 人の日本人留学生たちを見て非常に珍しがったといいます。

雪が降り続いたため汽車が動かず、サンフランシスコに半月ほど滞在した梅子たちは、2 月 25 日、ようやくミシガン湖の南に接するシカゴに到着しました。この頃ようやく、梅子たちは洋服を買ってもらっています。フリルの付いたドレスと帽子と靴のセットでした。この時撮影したであろう記念写真が、今も残されています。それが右の写真です（1 番幼い梅子は山川捨松の膝の上に乗せられて写真に収まっています。左から永井繁子、上田悌子、吉益亮子、津田梅子、山川捨松）。

5人の留学生たちシカゴにて
【提供】津田塾大学津田梅子資料室

同年 2 月 29 日、一行はようやく目的地のワシントンに到着しました。あたりには雪が 10 センチほども積もっていました。梅子は、吉益亮子とともにワシントン近郊のジョージタウンに住むランマン夫妻の家に預けられたのは、日本を発ってから約 70 日後のことでした。実は、5 人の留学生の後見人としてアメリカでの留学生活に責任を持っていた人物は、後に初代文部大臣になる森有礼でした。森は当時、日本弁務使館で少弁務使として駐米していました。森は自らの書記官を務めていたチャールズ・ランマン宅に数ヶ月間、幼い女子留学生たちを託しましたが、1872 年 5 月には、ワシントンのコネチカット街に自ら借家を借りて、家庭教師を雇ってレッスンを受けさせることで梅子たちの教育に当たりました。しかし、これでは、森が当初目指していた、女子留学生にアメリカの家庭生活を学ばせるという目的を果たすことができないことは明らかでした。そのような中、最初に梅子たちを預かってくれたランマン夫妻が、再び梅子の教育係に手を挙げます。夫妻には子どもがいなかったこともあり、特に妻・アデラインが当初から梅子を気に入っていました。日本から来た幼い梅子への愛情から、費用を負担してでも手元に置いて育ててみたいと希望したのです。そして梅子は、まるで夫妻の養女になったかのように愛情いっぱいに育てられ、ランマン家の家族として受け入れられることになります。

チャールズ・ランマンという人物は、20 代後半からジャーナリストとしていくつかの新聞社で職を得ましたが、30 代に入ってからは政府関係の図書館に勤務し、20 数年そこで働きました。書籍も数多く書いていて、絵画においても優れた作品を制作しました。梅子のホストマザーとして大きな役割を果たすことになる妻のアデライン・ランマンは、父が貿易を営む富裕な家庭に育まれ、女子の初等・中等教育では評価が高いカトリック系の歴史ある女子校で 16 歳まで教育を受けました。チャールズと結婚した際にはお祝いとしてレンガづくりの家を父から贈られており、その家で梅子は過ごすことになります。ちなみに、梅子を受け入れた時の 2 人は、チャールズ 53 歳、アデライン 46 歳でした。

一方、女子留学生の1人である山川捨松は、ニューヘイブンに住むレナード・ベーコン牧師の家庭に託されました。ベーコンは、奴隷制廃止論の著書も執筆している指導的な牧師でした。捨松はこのベーコン家で、2 歳年上のホストシスターとなるアリス・ベーコンと出会います。アリスは後に日本に赴き、華族女学校で梅子の同僚となる女性です。さらに梅子が女子英学塾を創設する際には、来日して最初に支援をしてくれた人物でもあります。

永井繁子もベーコン家を経由して、フェアヘイブンに住むジョン・アボット牧師の家庭にゆだねられました。ジョン・アボットは、母の役割を礼賛し、女性の道徳的優位性を強調した書物を書いています。

こうして 3 人の女子留学生のホストファミリーが決まりました。共通点は、必ずしも経済的に豊かではないものの教養のある人物達であるという点でした。一方、5 人のうちの吉益亮子と上田悌子は、慣れないアメリカでの生活の中で健康を害し、急遽帰国することになります。